

混迷を深めるブラジルと日本

島内 憲

Shimanouchi Ken

最近「ブラジルは本当に大丈夫なのか」とよく聞かれる。以前であれば、「大丈夫に決まっている。そのような質問をすること自体勉強不足の現われだ!」と自信たっぷりに答えていたであろう。しかし、ブラジルの現状をみれば懸念を抱くのは至極当然のことであり、質問に丁寧に答えるのがブラジル・ウォッチャーの義務である。

ブラジルの現状：想定以上の経済不調

2年ぐらい前までは、誰もが2014年のサッカーワールドカップ、2016年のリオ五輪、さらには、深海底油田開発をはじめとするメガプロジェクトなどの好材料がそろっているブラジル経済の前途は洋々と信じていた。ところがブラジルは、そのような内外の期待を裏切り、泥沼にはまっているかのようだ。経済が低迷しているのみならず、混乱は政治にも及んでおり、回復には相当時間がかかりそうである。そこでまずは、ブラジルが抱える問題の背景から論じてみたい。

現在のブラジルは一言で言えば、経済と政治が、さらに内的要因と外的要因が複雑に絡み合って合併症を引き起こしている状態である。明年、リオ五輪という国家的ビッグイベントを控えているにもかかわらず、成長のエンジンがかからない。それどころか、本年の経済成長率はマイナスになることが確実で、来年の展望も明るくない、というのが大方の見方である。その主たる原因としては、他の新興国と同様、中国経済の減速や資源価格の低迷などの外的要因が指摘されている。近年、ブラジル経済の一次産品依存が深まっており、そのため鉄鉱石輸出の不調が大きく響いていることは確かであるが、それだけが原因かと言うと、そうではない。以前、ブラジル政府は、通貨リアル高（彼らに言わせると他国の通貨安）による国際競争力低下を諸悪の根源と決めつけていたが、大幅なリアル安になった現在においても、輸出の増大も製造業の生産回復もみられない。一時期、経済成長を牽引していた自動車や家電をはじめとする耐久消費財の内需も低迷し続けている。その一方で、インフレは目標値上限（6.5%）を大きく上回る8%を超え、警戒水域に入っている。さらに悪いことに、景気後退局面に入ってもしばらく堅調を維持していた雇用にも変調がみられ、失業率が少しずつ上昇しはじめている。まさにスタグフレーションである。

どうしてここまで経済が落ち込んでしまったのか。外的環境が悪化したことは事実であるとしても、それだけでは、同じく資源依存度の高い多くの新興国にも見劣りする経済指標を説明することはできない。政権の対応に問題があったと言わざるをえない。ここへきて、左派政権特有の人気とり政策やリーマン・ショック後の対症療法的な経済対策のツケがすべて回ってきた感がある。財政規律の緩みによりインフレが悪化したのみならず、市場に対する政府の過剰介入が企業の投資意欲を削いでしまった。特に電気料金や銀行金利のスプレッドに対する政府の強権的な介入は投資家の不信を招いた。政府が景気浮揚の切り札と位置付けていた各種大規模インフラ計画も官僚主義と政府の不作為に阻まれて期待されていた景気浮揚成果を上げていない。

こうしたなかで、国有石油会社ペトロbrasの汚職問題が突如として表面化した。かつて時価総額で世界のトップテンに入っていた同社のスキャンダルは、その規模と広がりにおいて、ブラジル史上前代未聞の事態である。司直の追及は汚職に関与した企業のみならず取引相手の企業や、仲介した政治家にまで及んでおり、その影響がどこまで拡大するか現時点で見極めることは困難である。

政権は本腰を入れて経済立て直しに取り組んでいる

以上暗い話題ばかりであるが、楽観材料もある。幸い、今のブラジルは、かつてのブラジルとは違う。1980年代の危機を引き起こした構造要因、特に、石油の輸入依存、ハイパーインフレ体質などは、完全に過去のものとなっている。民主主義の定着や司法の独立では先進国に比べても遜色がない。現政権はこれまで政治・外交や経済政策の面で数々のミスを犯したが、状況の深刻さを認識するようになっており、危機感をもって経済の立て直しに取り組んでいる。遅きに失した感がないでもないが、強力な財務大臣の下で、財政赤字削減とインフレ抑制を中心とする政策を最優先で進めており、国際的にも一定の評価を得ている。もうひとつの重要課題として、製造業の高コスト体質の根本原因である保護主義的な貿易政策からの脱却があるが、ようやくメルコスール（南米南部共同市場）優先の内向きの貿易政策を見直し、域外との関係強化を模索する動きが出始めている。西隣に着々と築かれる太平洋同盟（メキシコ、チリ、コロンビア、ペルー）への世界各国からの熱い視線に、多少の焦りを感じている面もあるかもしれない。

もとより、インフラ整備、税制改革、労働制度近代化、公務員年金制度改革など、今後本腰を入れて取り組むべき課題は依然として少なくないが、現在のブラジルは、長年の放漫財政や構造改革先送りがいかに高くつくかを実感するようになっており、これまでにない真剣さを感じられる。ブラジルにも多くある「岩盤規制」に風穴を開ける好機が訪れており、今後の取り組みを見守りたい。

ブラジルのファンダメンタルズは抜群に強い

現在のブラジルは、濃い霧に包まれており視界不良に陥っている。しかし、霧である以上、いつかは必ず晴れる。また、ブラジルの場合、霧が晴れた後、美しい景色がみえてくるのが確実に期待できる。ブラジルの長期的見通しは依然として明るい。

どうしてそう言えるのか。資源の多様性と豊かさや食料生産能力が世界有数であることはよく知られている。そして忘れてならないのは、今日のブラジルは1980年代とまったく違う国になっていることである。経済規模で、欧州の主要先進国と肩を並べるようになっており、航空機製造、深海底油田開発、大規模農業生産・食品加工など一部分野では世界をリードするまでになっている。政治的には、新興国のなかで最も民主主義が自然なカタチで定着し発展している。一昨年来の大規模抗議デモは、一部マスコミで「アラブの春」と比較されたが、そもそも性格がまったく異なる。ブラジルの抗議行動は民主化の要求ではなく、民主主義の成熟の現われである。外交面では、最近、その一構成国として新興5カ国（BRICS）との協調行動が注目されているが、もとより穏健な国であり、国民の目を外にそらすために自ら緊張要因を作り出すようなことはしていない。地政学的にみて対外的なリスクに晒されているということもなく、地域における存在感は圧倒的である。また国内に目を向けても、政治体制、民族、宗教、人種などに根ざす不安定要因を抱えておらず、新興国随一の政治的安定を誇る。広大な国土、多様で豊富な鉱物・エネルギー資源、世界有数の食料生産能力のみならず、多民族民主国家特有のダイナミズムも備えている。人口をみても、中長期的にはほどよい規模と言ってよく、巨大人口国で顕在化している経済成長のボトルネック（水不足、環境汚染）がないことにももう少し注目してよいであろう。要するに、ブラジルはバランスの良い大国なのである。

わが国との関係

1980年代から1990年代にかけての経済危機のなかで一部日本企業はブラジルから撤退したが、このことが結果として日本にとって非常に高くついたことは、ブラジルのその後の躍進ぶりをみれば明らかである。多くの日本企業は、1990年代からブラジルのビジネス機会に目を付けた欧米企業の後塵を拝し、いまだ追いついていない。さらにここ数年、一部分野では中国、韓国企業の積極攻勢を前にして苦戦を強いられている。2000年代に入りブラジルに進出ないし再進出する日本企業が急増しているが、今もなお対ブラジル投資は安定的に推移しており、今回は踏みとどまるものと確信している。

わが国として今後ブラジルとの関係をさらに進展させるにあたり、次の点を必ず押さえておくべきである。

(1) ブラジルの目標は先進国入りである

ブラジルはわが国をはじめとする先進民主主義国と基本的な価値観と目標を共有し、内心では新興国より先進国に親近感を抱いている。現に、国際社会の広い文脈のなかでみれば、新興国の安定勢力、良識派としての役割を果たしている。そういうブラジルを他の新興国（特にBRICS）と一括りにしてはならない。なぜならBRICSと言っても決して一枚岩でなく、特にブラジルにとっては、BRICSとの関係、とりわけ中国との関係は、必ずしも居心地の良い関係ではないからである。中国とは、基本的価値観のみならず経済面の基本的利害でも相反する面がある。BRICS重視外交や最近のアジアインフラ投資銀行（AIIB）加盟は、ブラジル外交の打算的、実利的な側面を示したものであり、必ずしもブラジル外交の中心的柱ではない。ブラジルの目標はあくまでも先進国入りである。わが国はこの点を見誤って、ブラジルをかえってBRICSなど新興国の結束強化の方向に追いやってはならない。

(2) ブラジル人の対日信頼感は絶大である

わが国とブラジルの間には、世界最大の日系社会（190万人）の存在と、長年にわたる協力実績に裏打ちされた強固な関係がある。ブラジルほど日本との関係を大事にし、日本との「特別の関係」を誇りにしている国はない。また、ブラジルほど日本と日本人に絶大な信頼感をもっている国もない。現在、経済停滞に陥っているが、ブラジルは必ず復活し、世界経済のなかで指導的な役割を果たすようになることは確実である。そういう国が存在することは、わが国にとって貴重な資産であり、われわれはこのことを忘れることなく、グローバル外交を展開する必要がある。そうしない場合、損をするのはブラジルではなくわれわれの側であることを心に銘記せねばならない。

（8月上旬執筆）

しまのうち・けん 元駐ブラジル大使